

— 取人の衣服を中心として —

東京家政学院短大 岡野和子 実践女短大 樋口富枝

目的 急速な技術革新と産業機構の変化、生活環境の近代化に伴って、在来型労働着は消滅寸前の様相を呈している。伝統的手工業にたずさわる取人たちの衣生活も、数十年前の状況から激変し、取人衆の制服ともいえる腹がけ、股引、はんてん姿は現在ごく限られた人びとによって、わづかに着用されているに過ぎない。しかし時間的・空間的に多大なひろがりをもったこの特殊な衣生活の背景には、それを可能とした生活文化と生活基盤が存在したことを裏付けている。これらの背景となった取人の生活意識を探り、現在なお在来型労働着に愛着を示し、これを着用し続ける人たちの思考性を求め、同時にその形態・構成・縫製技術・着装などについて究明した。

方法 歴史的な面からは文献・絵画資料を基にした。取人の業種としては、とび取・いかだ取・畳取・仕立取人など、多くはクオオを越える人たちに直接面談して、過去の実情現在の実態を採録した。なお技術面では裁縫教科書での教材としての扱われ方を検討すると同時に農村労働着の同型のものについて比較・考察を試みた。

結果 以上のことから在来型労働着としての取人衣服には、その生活実態から導き出された知恵の結集が表示され、労働服としての機能性が考慮されている。また取人服としての表現性、生活意識の表出という面が強く認められたが、取種の違いによって異なる点も指摘される。特殊な取業分野を構成する伝統的技術保持者としての取人の衣生活をとらえることができたので、その一部を報告する。